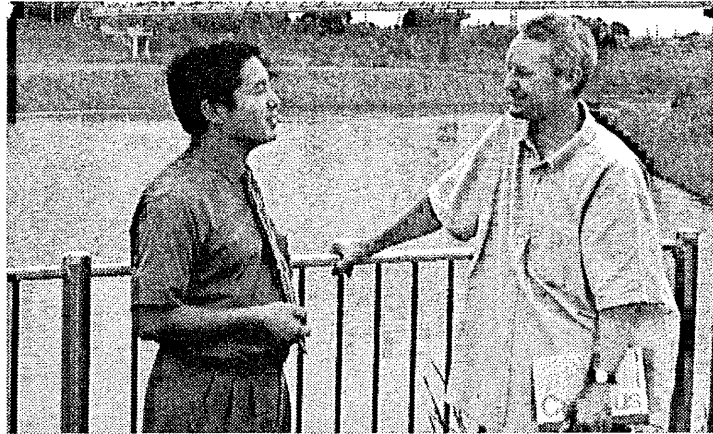


コアシサシの営巣地 近くに堤防道路計画

人の出入りでごみ増

カラス被害心配の声 厚木市 相模川



コアシサシの営巣地前で取材する
マイケル・ミレット記者（右）

コアシサシは体長30センチのカモメ科の鳥。4月中旬ごろにオーストラリアや東南アジアから日本に飛来し、産卵と子育てをして夏に帰る。ある程度の規模を持った営巣地は、国内では数十カ所程

厚木市の相模川に飛来する渡り鳥コアシサシの営巣地近くに堤防道路の建設計画があることについて、研究者や自然保護団体から環境悪化を心配する声が出ている。人の出入りでごみが増え、カラスが巣を荒らすようになるなどの指摘で、営巣地が無くなかねないという不安も聞かれる。建設を計画している厚木市は、営巣地と道路予定地が約300メートル離れていることから「影響はない」との見方だ。

度とされている。環境省のレッドデータブックで

絶滅のおそれのある種に指定されている。

厚木市の営巣地は、海老名市との間にまたがる相模大堰下流の中州。7年ほど前からすみつき、200〜300羽が飛来する県内最大級の営巣地になった。

コアシサシの生態に詳しい湯河原町立湯河原中の室伏友三教諭は、道路が出来ることで河川敷に捨てられるごみが増えることを懸念する。つられて集まるカラスがコアシサシの卵やヒナを食べてしまう。カラスが居つい

た場合、営巣しなくなることもあるという。

昨年5月には、別の環境保護グループも、山口巖雄市長に計画中止を申し入れている。

市幹線市道課は「小田原の酒匂川で、堤防道路が出来た後も営巣が続いている例がある」と説明。年ごとに生息条件のいい場所に営巣地を作る習性があるため、「ここを去っても、別に営巣地を見つけた」という研究者の指摘もある。

だが、室伏さんは「安心してすめる場所が無いから、ここに集まってきた」と反論する。

30日にはコアシサシのふるさとである、オーストラリアの日刊紙シドニーモーニングヘラルドのマイケル・ミレット記者が現地取材。「私の国から来た鳥が暮らす環境が、今後どうなるか興味がある」と話した。

現在、道路計画は市議会でも、建設促進と反対の立場から論議している。6月定例会で方向が決まる可能性がある。